

平成30年度からの 学校経営ビジョン

**2020年4月
全面実施の新
学習指導要領
を見すえた、
宮久保小学校
の教育**



これからの世の中は

第4次産業革命の時代

- 今の子どもたちの65%は、10年～20年以内、今は存在していない職業に就く。
- 約47%の仕事がAI・ロボットにより自動化される可能性が高い。
- 2030年までに週15時間働けば済むようになる。広がり続ける経済格差。
- 少子高齢化の拡大により、2020年には日本の平均年齢50歳。

※迫られる発想の転換。

⇒社会の早すぎる変化 あふれる情報 先の見えない将来 **成功モデルのない時代**がやってきている。「**今までは**」、**が通用しない時代へ**。

- 今の若者 社会のために役立ちたいと思う 54.5%
しかし、社会は変わらないと思う 60%
- 新入社員の働く目的
楽しい生活をしたい 45% 経済的豊かさ25%
- 情報を選んでいるつもりが、いつの間にか操作されている。
- 75歳以上の医療費全体に占める比率は25%
- 2025年団塊世代が75歳を超える。団塊ジュニアも40歳以上。
- 少子高齢化 2015年65歳1人に対し2.1人が支える。
支え手は減る一方。今のままでは、年金制度は……

◎19歳以下の子供1人に対し、20歳以上の大人は4.7人

◎子どもの支え手は、2035年は子供1人に対し、6.9人まで増える。

学校教育は転換期に来ている

国や行政は大きな教育の流れを示すことはできても(新学習指導要領=学びの地図)、一つの教育成功モデルを作ることはできなくなっている。



●昭和の成功モデルは、良い高校、良い大学、良い会社、定年まで働き続け、定年後は年金で悠々自適に生活する。



こんなモデル、今はありません。

外の世界の中に、学校が存在している ～浅い知識、浅い理解はスマホから～

- 学校の情報量と学校の外の世界の知識、情報と言う垣根はなくなっている。学校の外の世界の中に、学校が存在しているという新たな認識が必要であり、学校教育に対する発想の転換が求められている。
- 学校のことは学校に任せておけばよいという、自己完結型の学校教育は、成り立たなくなる。
- 既存の学校と言う場所に行く、行かない等、いろいろな選択肢・価値観が認められ、それが当たり前になっていく社会がやってきている。

新しい時代を迎える学校の存在理由

◎バーチャルではない、リアルな人間関係の存在する社会としての学校。様々な価値観・文化・働き方等の親を持った子どもたち同士が、そして、教職員が、学校の教育活動をとおして互いに「学び合い 認め合い 高めあい 支え合う」ことを目的とした「人が人を育てる」「人が人をつなぐ」場が学校

◎アナログでリアルであり続けることが学校教育の役割と言えよう。

学校という存在がAI、ロボットに変わることがない理由はそこにある。

これからの学校教育は

●AIが進化し、人間が活躍できる職業がなくなるのではないかと言う不安。今学校で教えていることは、時代の変化により通用しなくなるのではと言う不安。

だからこそ、子どもたちには、急激な社会変化の中でも、AIやロボットではできないであろう「**新しい価値を**」**生み出していくための、資質・能力を確実につけさせていかなければならない。**

☆**学び方を学ぶ授業へ。** 課題に対して今考えられる解決方法を子どもとともに**学び合う授業へ。** 新たな価値を生み出す授業へ。

☆**人が人を育てる学校教育の実践。** **人が人をつなぐ学校教育の実践へ。**

学校経営ビジョン
—新学習指導要領実施に向けた4つの「づくり」—

学校教育目標

「夢に向かって挑戦

Challenge for dream」

知・徳・体の調和のとれた人間の育成

- ☆心身ともに健康でたくましく、
- ☆豊かな情操を持ち、相手を思いやり、
- ☆自分で考え正しく判断し、他の者と協力し行動できる児童の育成を図る。

新学習指導要領実施に向けた4つの「づくり」とは

1. 社会に開かれた教育課程を目指しての「学校づくり」
これからの社会はどのような人材を必要としているのかという視点からの「学校づくり」
2. カリキュラム・マネジメントの実現のための「教育課程づくり」
教科横断的な視点で、学校の教育目標の達成に必要な教育内容を組織的に配列していく「教育課程づくり」
3. 「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善のための「授業づくり」
各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を踏まえた主体的・対話的で深い学びを実現する「授業づくり」
4. 学校の業務改善のための「職場づくり」
新学習指導要領への円滑な移行を図るため、教職員の業務を改善する「職場づくり」

1 学校づくり

学校の教育活動をとおして互いに「学び合い 認め合い 高めあい 支え合う」ことを目的とした「人が人を育てる」「人が人をつなぐ」学校づくりのために

(1)めざす学校像

○意欲と活力のある児童と教職員が信頼の絆を深める学校

○地域に支えられ、地域を支える学校

(2)めざす児童像

○自ら学び・考え、課題に向かい粘り強く取り組む児童

○人間性豊かで、礼儀正しく、思いやりのある児童

○心身ともに健康でたくましい児童

(3)めざす教師像

- 児童一人一人をよく理解し、大切にする教師
- 児童のために自らの資質の向上に努める教師
- お互いを尊重し認め合い、学びあい、仲間とともに高めあう教師

(4)ねがう保護者像

- 子どもの共育のために、教職員と協働・協力する保護者
- 子どもを愛し、責任を持ち教育する保護者

(5)ねがう地域像

- 地域が好きになる子どもたち、地域の中で育つ子どもたち、地域を支えていく子どもたちの育成に向けた、共育のできる地域。

3 経営の基本方針

(1) 自分の良さを生かし、互いに認め合い、
学びあい、励ましあうことで、お互いに高
めあえる児童を育成する

(2) 児童一人一人の良さを見出し、伸ば
す教職員となる

(3) 児童の成長のために全教職員が協
力・協働する学校を作る

(4) コミュニティ・スクールの実施にむけ
「人が人を育てる」「人が人をつなぐ」学校
づくりを行う。

2 教育課程づくり

自分の良さを生かし、互いに認め合い、学びあい、励ましあうこと
で、お互いに高めあえる児童を育成するために

1 確かな学力を育むために

(1) 言語能力の確実な育成

発達段階に応じた語彙の確実な習得と、情報を正確に理解し適切に表現する力を育成するため、学習スキルの「書くスキル（書く）」「対話するスキル（聴く）」「話すスキル（話す）」を徹底して身に付けさせる。そこで、今年度は「対話するスキル（聴く）」を中心に取り組む。

- ◎ **相手の意図を分かって聴く。**
- ◎ **自分とは異なる考えも共感して聴く。**
- ◎ **友達が言いたいことを想像しながら聴く。**

(2) 学習指導の充実

- ① 算数科における少人数学習のさらなる充実を図る。
小3より少人数指導を行う。
- ② 全教科の基盤となる国語科の授業の充実を図る。
(自主公開授業研究会の実施)
- ③ 学習規律や学習習慣の確立
- ④ 家庭と連携した家庭学習習慣の定着を図る。
- ⑤ 市川市では、2020年よりはじまる3. 4年生の外国語活動、5. 6年生の外国語科を2018年より先行実施します。
- ⑦ 中学校との接続を意識した授業参観の実施。

2 豊かな心を育むために

(1) 道徳教育の充実

平成30年度より行われる「道徳科」を確実に行うことで、

- ①いじめの未然防止に力を入れる。
- ②日常の中でより良い生き方をするための道徳的実践力を高める。

※考え、行動に移せる児童を増やす。

(2) 児童理解にもとづく早期対応。

●いじめに特化したアンケートを年に3回(学期に一回)行い、全児童を対象とした個人面談を行うことで、早期対応、早期解決を目指す。

●いじめアンケートに加え、年に2回(前期・後期)に低学年は「学校生活アンケート」3年生以上は、「アセス調査」を行い、児童理解及び気になる児童への早期対応を行う。

3 健やかな体を育むために

(1) 体育の授業の充実

◎体力及び運動能力向上のため、正課体育の充実を図る(特に器械運動を中心に)とともに、体力向上を推進に向け、継続して持久走や遊具サーキットコースを必ず準備運動に取り入れることや体育学習カード等(水泳カード・縄跳びカード等)を作成し、全校児童が楽しく、目標を持ち取り組めるようする。

(2) 中学校との連携をめざす

◎専門性が特に求められる器械体操については、本校の器械体操の経験者が中心となり、教員に実技指導を行うことで、指導力を高めることで、児童の能力を高める。

◎球技については、中学校の体育の教員で専門的知識・技能を持った教員より、本校教員が指導を受けることで、指導力を高め、授業に反映させるための、連携を目指す。

3 授業づくり

(1) ユニバーサルデザインの教育を意識した 授業づくり

—学力向上推進委員会の取り組み内容の継続—

- ①**家庭学習への指導の継続**。家庭学習を学年目標時間(1学年×10分 6年生は60分)を最低目標時間とし、個々の児童の実態に合わせた課題を行わせるようにする。全員同じ課題であっても、ユニバーサルデザインの視点から、個に合わせた課題とする。
- ②**家庭学習カードの点検**を確実に行う。担任は1週間ごとに確認する。持って帰ると忘れてたり無くしてしまう場合が予想される場合は、学校で書かせる等合理的配慮を行う。

③授業規律について

- ・授業の始めと終わりの挨拶の徹底。静かになったら始める、終わる。
- ・名前を呼ばれたら、(起立し)返事をさせる。
- ・授業時の正しい姿勢。(正しい姿勢の掲示物を提示)授業の初めと終わりは特に意識させる。
- ・学習問題は、青。まとめは赤で囲む。

④授業開始時は、机の上には必要なものだけを出すよう指示する。

⑤学級掲示の工夫

教室前面の掲示物は、子どもがより黒板に視点が行くような掲示物の掲示場所の工夫を行うことで、授業への集中を高める。

(2) 研究授業の積み重ねによる授業づくり

研究テーマ「自分の考えをもち、伝え合う児童の育成」 ～国語科における対話的な学びを通して～

| 4STEP | 留意点 |
|---------------------------|---|
| ① 指導事項を決定する | 学習指導要領解説から、つけたい力をしぼって決定する。 |
| ① 言語活動を設定する | 指導事項に合う言語活動なのか考える。活動が目的とならないよう、児童につけたい力は何かを明確にし、授業を構成するようにする。 |
| ① 児童の言語活動についてイメージをもつ | 教師見本を作ることで、教師が子どもの思考過程をつかみ、ゴールを達成するために必要な学習やつまずきに対する手立てを考えることができる。 |
| ① 見通しと振り返りの場面を設けた学習計画を立てる | 学習のゴール設定や教師見本の提示、学習の流れの計画などで見通しをもたせる。また、学習の終わりにどのようなことができるようになったのか振り返り自覚することで、次の学習に生かせるようにする。 |

| | |
|-----|--|
| 低学年 | <p>① <u>身近なことや想像したこと</u>から自分の考えをもつことができる。</p> <p>②相手に伝わるように、<u>伝えたい事柄の順序</u>を考えることができる。</p> <p>③相手が伝えたいことをとらえることができる。</p> <p>④感じたことや分かったことを伝え合うことができる。</p> |
| 中学年 | <p>① <u>相手や目的を意識して</u>、身近なことや想像したことから自分の考えをもつことができる。</p> <p>②相手に伝わるように、<u>理由や事例を挙げ、構成</u>を考えることができる。</p> <p>③相手が伝えたいことの<u>中心</u>をとらえることができる。</p> <p>④感じたことや考えたことを伝え合い、<u>一人一人の感じ方などに違いがある</u>ことに気付くことができる。</p> |
| 高学年 | <p>① <u>目的や意図に応じて</u>、感じたことや考えたことから自分の考えを<u>まとめる</u>ことができる。</p> <p>②自分の考えが伝わるように、<u>資料を活用したり、構成を考</u>えたり工夫することができる。</p> <p>③ <u>目的や意図に応じて</u>、相手が伝えたいことの中心をとらえ、<u>自分の考えと比較</u>することができる。</p> <p>④ <u>意見や感想</u>を伝え合い、<u>自分の考えを広げたりまとめたり</u>することができる。</p> |

(2) 教えて考えさせる授業づくり

子どもたちに、いろいろなことを教えた結果、子どもが断片的な知識をただ丸暗記していることは、「浅い理解」。多くの知識が関連付けられて、いろいろな場面で活用できる知識となっていくことが「深い理解」。

まず知識・技能の習得を

まず「知識・技能の習得」です。例えば授業の前半部分では、基礎的な知識や技能を丁寧にわかりやすく教え、後半ではやりがいのある問題を扱えば、授業の前半で、子どもたちが基礎的な知識を共有し、後半のやりがいのある問題にも参加することができるようになります。

行動の基盤には知識が必要です。例えば台風情報が分かるためには、知識があるから情報も理解できます。知識があるから理解でき、記憶したり新しいアイデアが生まれてくる。知識がなければ知的活動はほとんどできなくなる。ただし、正しい知識をたくさん持つことがゴールではなく、知識を生かしてより進んだ探究や次の習得に向かうことが大切です。

次に、深い理解をさせる。

「深い理解」のためには、知識・技能の習得が大切です。効果的な習得のためには、「人に説明する」「自分の言葉で要約する」など能動的な活動が必要です。また、問題解決や討論を行う中で、



●自分の考えの理解不足や思い違いにも気が付くようになります。どこで思い違いをしたのか、どこで間違えたのか、なんで間違えたのか、どうしたら間違えずにすんだのか、などを大切にすることが大切です。習得の中に「教師が情報を与える場面」と「考えさせる場面」を授業の中に入れます。

そして、教えて考えさせる授業へ

教師の説明を聞き、子ども自身が人に説明することで、説明の聞き方も変わってきます。そして、お互いに内容を理解し合う確認を行い、学級で共有化することで深い理解へつなげ、自己評価することで、授業は自分のこととしてとらえられるようになります。

教えて⇒どの子にも理解できるように丁寧にわかりやすく授業をする。

考えさせる⇒理解確認、理解深化

このような習得におけるアクティブ・ラーニングを行うことも、「主体的、対話的、深い学び」と言えます。

聞き方のポイント

「どんなこと」（内容）⇒「その理由は何だろう」（理由）
⇒「そのあとどうなった」（影響）⇒「その結果どうなった」（結論）

4 職場づくり

(1) 児童理解に努めるとともに、教職員が互いに、「学び合う」「認め合う」「高めあう」教職員集団。

★自分を大切にする、同僚も大切にする、子どもも大切にする教職員集団。

○子どもの個性、環境、背景、心の動きが見える。

○どの子にもある良い点を見つけて育てる。加点法で育てる。

○現状に満足することなく、新しい取り組みに意欲を持つ。アイデアを生かす。

○「集団規律」及び「学習規律」を意識した学級経営及び学年経営ができる。

○自分たちの学校は、自分たちでつくるという強い意志と責任を持つ。

(2)意見だけではなく、自分のこととして、学校全体を見て提案できる教職員集団。

○豊かな経験に加え、新たな取り組み、提案ができる。

～経験がないから、前例がないからではなく、また、例年通りではない、経験したことのないことに挑戦ができる。～

(3)働き方の改革ができる集団。

○業務の見直し、効率化、合理化を目指し、今までの業務全体について見直す。モラールアップ委員会を中心としたボトムアップ型の提言をもとに、職場全体で働き方改革を推進する。

目指す教職員集団は、互いに「認め合い」「学び合い」「高めあう」集団である。「自分たちの学校は自分たちでつくる」という志を持った教職員集団である。同時に、「お互いを大切にする」「お互いに支え合う」「お互いに弱音が吐ける」集団であれば、子どもたちも、互いを「認め合い」「学び合い」「高めあう」集団となる。

わが子にどんな未来を託しますか

昔から、子は親の鏡と言われていています。子どもにとって一番身近な存在は親です。親が子どもにとっての社会の窓口です。親を手本として、それが当たり前のことだと思い生活しています。だから、親の言動を子どもは真似をします。親が他人にやさしく接すれば、子も他人にやさしくします。「真似ぶ＝学ぶ」ということです。子は親から学んで育ちます。親が子どもにできることは、近い将来子どもが社会に出て多くの人と関わり暮らしていくために、何を子どもに残すのか。親の歴史を受け継ぐわが子は未来の歴史を創るわが子。そんなわが子にどんな未来を託しますか。

すべてのカギを握っているのは皆さんです。